と關係なく進んだ、西北方の印度ギリシア彫刻家が、オリンピアの諸神について長い間親しんで來た所を以て、恰も魔法杖でも使つた樣に、犍陀羅 Gandhāra 式の佛陀を造るに至つたのであるが、此の問題については、既に、大部の出版をした事とて、此の美術的革命の歷史的起源や、其の克ち得た非常な繁榮に關して、こゝで縷述するまでもないと思ふ。唯その眞の理由だけを云へば、それは、古代派を十分に調べて自然に出て來る所なのである。犍陀羅派が急速に且つ一般に擴がつたのは、一にその美術的に優越してゐたにあると信じ得たのも可なり久しい事で、之を佛教美術發達の全體から見れば、其の成功した所以は、實に、其構圖が、佛傳をば直接に、何の障碍をも感ぜず、何等忌憚する事もなく取扱つたに依るのは明かである。ギリシア風佛教の作品が、忽ち印度のみならず、東亞を悉く覆ひ、東南はヂャヴに、東北は日本に及んだのも、その作品が、佛傳を現はすのに、凡て佛陀の像を中心としたのが、終に、何れにも優つて最も明かに佛教的であつたからである。

更に注意を促しておく點がある。こゝでは佛教美術を歷史家の立場で觀察